

既存の取り組みを生かして 多彩な活動を実現する

2003年度から実施される新課程の目玉の一つが「総合的な学習の時間」だ。「生徒が自ら学び、自ら考える」という新学習指導要領の考え方が凝縮され、新たに設定された時間と言える。

しかし、今までにない、全く新しい時間であることに加え、教科書もなく新学習指導要領には具体的な説明が少ないため、どういう取り組みをしたらよいか分からない、教師に負担がかかるのではないかと、といった声もあり、多くの高校が暗中模索の状態のようだ。

新しい授業にどう取り組めばよいのかを、Q&A形式で確認すると共に、既に「総合的な学習の時間」を視野に入れた取り組みを行っている三つの高校を紹介する。

Q 新課程では授業時間が少なくなり、「総合的な学習の時間」に力を入れている余裕はないように思う。また、教科書もなく、担当教師には準備などに負担がかかると思える。効果的かつ効果的なやり方はあるのか？

A …ベネッセコーポレーションによる「総合的な学習の時間」に向けた先行事例の聞き取り調査でも、当初は教師の負担が大きくなるのでは、という不安が強かったようだ。しかし、この時間は「生徒が自ら課題を発見し、考え、解決する」のがねらいであり、調べたり、勉強する主体は生徒。教師はそのサポート役と考えた方がよいだろう。したがって、「教師がすべてを教え

なくてはならない、教師がすべてを知っていないといけない」という従来の授業の発想からは抜け出た方がよいと言えそうだ。「教師が知らないことがあってもよい、一緒に学んでいく」という、ある意味で肩の力を抜いた姿勢が必要と思われる。聞き取り調査でも、そう考えたら負担を感じなくなっただ、という回答が多く寄せられている。

例えば環境問題をテーマにした場合、「環境庁のホームページを見てみたら」という支援の仕方でもよいだろう。地域に住むそのテーマに詳しい人に話を聞きに行かせるという方法もある。教師が全部を背負い込む必要はないし、それは現実的ではないと言えそうだ。

「総合的な学習の時間」では、新し

Q どんな取り組みをしてよいのか分からない。実践例を教えてください。

A …一つの方法として、学校行事と

せ、最終的に生徒の適性や進路と結び付けられるものならば、テーマの題材は広く多様な分野から集めてもよいのではないだろうか。

Q 小・中学校でも「総合的な学習の時間」が設置されるが、どのような取り組みをすることになるのか。また、高校の「総合的な学習の時間」は、それとどう関連性を持たせるべきなのか？

A …小・中学校の研究指定校の事例や、学校の特別活動などの時間枠で行われている事例の定番は「環境」をテーマにしたものだ。地元の川に行っても、どんな生き物があるか、川の汚染状況はどうか、などを調べたり、酸性雨の調査もよく行われている。もう一つのテーマは「地域」。自分が住む地域の歴史、自然、産業、あるいは自分の学校の歴史などを調べたり、その結果をインターネットにホームページを作った載せたりしている所もあるようだ。

また、大学のゼミ形式のように、教師がそれぞれ講座を開設して、生徒はその中から興味のあるものを選んで受講する方法もある。講座のテーマは、その教師の興味と絡めて設定してもよいのではないだろうか。家庭科の教師が、昔から『源氏物語』に興味があれば「源氏物語と当時の衣装」という講座を開いてもよい。生徒に考え、学ば

に引き付けて、将来どんな形でそのテーマにかかわることができるのかという視点を持って取り組ませたい。したがって、例えば環境をNGO（非政府組織）の活動と結び付けて考えさせれば、社会活動に興味があると気が付くかも知れない。また、インターネットなどを使った海外の高校生との情報交換などから、環境を足掛かりに国際的な職業や外国語学などの学問と結び付けてもよい。もちろん、環境に一番興味があるという生徒には、小・中学校で扱った問題をもっと深める方向で取り組みせるとよいだろう。まず、生徒の適性や将来やりたいこととマッチングさせることが必要と言えそうだ。

Q 「総合的な学習の時間」の内容を考えると、教科とは異なり、点数などの絶対的な評価が難しいのではないか。評価については、どういう考え方で進めていけばよいのか？

A …新学習指導要領には「総合的な学習の時間」について、どんな風に評価しなさい、とは書いていない。教育課程審議会の答申の中で「試験の成績などで数値的な成績を付けたり、評定を行うことはふさわしくない」と書かれているだけだ。そのため、「総合的な

学習の時間」では評価はしなくてもよい、という考えが一部にあるようだ。

しかし、指導の指針として評価は必要だろう。生徒がどこまで目標を達成したか、それを受けてどういった活動をさせていくか、といった指導の目安、今後の指針として、何らかの評価は必要である。また、生徒にとっても、自分がどこまで達成したかの目安として評価は必要になる。何もないと、自分が目標に対してどれだけのことを成し遂げてきたのか分からなくなる危険がある。選抜、選別のための評価はふさわしくないだろうが、指導の指針や目安としての評価は必要だと思われる。

では、実際にそれをどういう形の評価にするかとなると、必ずしも評価法が確立されていないのが現状のようだ。ただ、教課書の答申の中に「生徒のよい点や学習に対する意欲や態度、進捗の状況などを適切に評価する」とあり、生徒のよさを積極的に見てやる評価が一つの形として考えられる。

また、アメリカやイギリスでよく採用されている評価法としてポートフォリオ評価がある。研究成果をファイリングし、それを基に個々の生徒の成長をあらかじめ決められた観点ごとに見て評価する方法だ。評価の仕方の一つとして参考になるだろう。

実践例 熊本県立鹿本高校

明治29年創立。普通科1097名。
'99年度入試は四年制大現役合格者284名

生徒に自己の在り方、 生き方から考えさせる 入念なプログラムを用意

自由な発想の中から 興味を引き出す

鹿本高校は、文部省から研究開発学校の指定を受け、既に今年度の1年生から「総合的な学習の時間」の取り組みを開始している学校の一つだ。

4月の1時間目はガイダンス。2時間目はAppleプログラムと名付け、リンゴ(クラスによってはサツマイモ、水、卵など)1個から何を思い付くか自由に連想して答えさせた。ゴリラや白雪姫などいろいろな答えが出てきたが、それを通して一つの物もいろいろな見方ができることに気付かせた。3時間目は前の時間に出てきたイメージからさらに疑問を引き出し、4〜6時間目でその疑問をインターネットなどを使って調べる作業に移った。この際

全クラス一斉で使うには数に限りのあるパソコンを効率的に使用するため、クラスごとに時間を設定して実施するようにした。

2学期は九つのテーマを設定、生徒に好きなテーマを選ばせ、クラスを解体してテーマごとに九つのグループを作った。

「1学期に一つのリンゴから始めてイメージを広げるだけ広げさせて、自由に考える重要性、楽しさを分からせた上で、2学期にやりたいテーマを選ばせる方法を探りました」と西泰弘先生(総合的な学習の時間」の研究開発委員会委員長)は語る。このときはクラスを解体して学年一斉の授業とした。つまり「総合的な学習の時間」の内容に合わせて、2種類の時間割を作成運用しているのだ。

「2学期にクラスを解体する」と言うと、生徒は嫌がりましたね。ようやくクラスのメンバーと仲良くなったのに、また知らない人とグループを作るのは嫌だ。実はそこがねらいなんです。今の生徒は小さな人間関係の中で自足する傾向があるので、それを一旦壊して人間関係を築く力を付けさせよう。知らない生徒たちの中で自分の役割を考えて行動し、またその中で堂々と自分の考えを述べる訓練になるのでは、と思いました」

前述の九つのテーマとは「環境」「健康と福祉」「国際交流」「経済・産業」「民俗」「建造物」「方言」「風土」「芸術」。また、共通のキーワードは「郷土」で、いずれも郷土とのかかわりの中で研究を行う。担当教師は、あまり得意ではないテーマを積極的に受け持つて

いると言った。

『総合的な学習の時間』のねらいは生徒が自ら学び、自ら考えること。教師は生徒に教えるのではなく、生徒と一緒に学び、一緒に作り上げていきます」

西先生はすべてのクラスの授業に参加している。各担当教師とのチーム・ティーチングの採用は、生徒へのフォロを充実させるだけでなく、各クラスの取り組みを西先生が媒介して、すべての教師が共有化するためでもある。そして3学期には、2学期で学び考えたものを発信する作業として研究発表を行う。

「総合的な学習の時間」に対する生徒の反応は上々だ。生徒に取り組みの感想を聞くと、「楽しい」「この時間が来るのが楽しみです」といった言葉が返ってくるそうだ。

担当する教師は、当初は戸惑いやストレスもあったが、少しずつ「こんな感じでもいいのかな」と指導のスタイルを飲み込みつつあるという。現在「総合的な学習の時間」の小委員会を週に1回開き、さらに学年でも週に1回の打ち合わせを行い、授業方法や課題などを話し合う場としている。

生き方を考える 未来型進路学習

そもそも鹿本高校では、「総合的な学習の時間」をどう捉え、どこに目的を置いているのか。基本は、「生きる力を育む」とこと、「知の総合化」にあると言った。そのための指導の流れとして、

- ・1年次「方法知(学習の仕方を知る)」
- ・2年次「内容知(興味・関心に基づいて、個人レベルのテーマ学習を行い、学問の内容を知る)」
- ・3年次「自己知(1、2年次の取り組みを踏まえ、自分史を作り、在り方、将来の生き方を考える)」

と位置付けている。西先生はこれを「未来型の進路学習」と呼ぶ。

「従来の進路学習は、文理コースの選択や大学の学部・学科研究などに比重が置かれていました。しかし、実際には生徒はそれ以前の段階、自分の興味・関心がどこにあつて、どう生きて



鹿本高校、総合的な学習の時間」の研究開発委員会委員長 西泰弘
1学年副主任 生物担当
『総合的な学習の時間』を通して生徒はもう一人、我々の教員職も変わるのではなごうか

いくつかという段階をクリアしていないんです。ですから、土台である『自分の在り方生き方』を考えさせることに重点を置く必要があります。『未来型』とはそこを重視する進路学習です」

例えば、九つのテーマから「建造物」を選び、郷土の古墳について研究するとしよう(この地域は全国的にも稀な装飾古墳で有名)。

「考古学的な研究だけだと、そこから生き方は模索できません。それで、例えば『古墳の大きさ測ってみよう』を軸にして、測量的な技術を使ってどのくらいの土が盛られているか、その土を運ぶのにどのくらいの日数が必要か、現代の貨幣価値で日当はどのくらいかなどを探ります。すると古墳をテーマにしながらも、僕は経済の勉強が面白い」とか、私は歴史にワクワクする」とか、自分の興味・関心が体験的に見つかるのではないか。そういうプログラムとして考えています」

2年次では、1年次で探った興味・関心を基に、生徒がそれぞれ自由にテーマを設定し、個人レベルで課題研究的な学習を行う予定だ。基本は個人研究だが、1学期の初めにそのテーマが「総合的な学習の時間」にふさわしいかをグループ内で議論したり、似たテーマを設定した生徒が集まって一緒に研

「総合的な学習の時間」指導計画案(1年次1学期)			
項目	指導内容	学習形態・留意事項	時間
「調査方法を学ぶ」	オリエンテーション1	学年一斉(講演会)	1
	オリエンテーション2	クラス単位・年間全体計画の提示	1
	Appleプログラム 課題・問題の発見 研究の手順について 調査の手順<1> 調査の手順<2> 調査の手順<3> データ処理 レポートの書き方 ミニレポート作成と発表	クラス単位 班ごとに1個のリンゴを配り、そのリンゴを巡って生徒たちがどのような課題を発見し、それをどうすれば解決できるのかを学習する。 具体的には図書館での文献検索の方法やインターネット上での検索の方法等を体験する。 また、今後学校外に出て学習することを考えて、アポイントメントの取り方やその意義、依頼文の書き方など社会人としてのマナーを学習する。 取材の仕方、メモの取り方も適宜指導を深めていく。 まとめとして情報処理に不可欠な表計算ソフトや文書作成ソフト等の操作を体験し、ミニレポートを作成する。今後、レポートはパソコンで作成し、校内のみに公開されたホームページに発表し、いつでも閲覧可能な状態にしておく。	8
	2学期から取り組むテーマを提示・決定。グループを編成	九つの領域から、自分の興味・関心のあるものを選び、同じ分野を選択した生徒たちで班を作る。ここでは仲間作りも重要な課題である。班は研究チームとして相互に協力し、課題解決に当たる。 班ごとに研究テーマを設定し、クラスでテーマ設定の発表を行う。	2

「成功へのエチュード」は大学の学部・学科で研究する内容で、かつ生徒たちが高校1年生で研究可能な分野を設定する。研究の内容が偏らないように、高校での教科の枠組みをあえて外した分野分けを心掛けた。3年生になると「自分史」を作るときには、このとき選んだテーマが、各自の原体験とどのような関連があるかについての考察も行わせる。生徒の興味・関心と進路との関連を押さえる。

究したりと、グループ学習も取り入れる。後半は1年次同様、研究成果の発表を行う。3年次の自分史作成では、これまでの人生とこれからの人生を、1、2年次で学んだ研究と結び付けて考えながら自分史を作る。

「1年生のとき、なぜ九つの中からそのテーマを選んだのか。2年生のとき、なぜ個人テーマとしてそれを選んだのか。それは例えば中学生のときの体験と関係があるかも知れない。自分のこれまでの人生や1、2年次での研究を振り返って将来はこう生きていきたい、といったことをまとめさせます。将来のことなど、1年生のときはほんやりとしか考えていなかったのに、2

年後の自分はこんなに成長したんだと気付いてほしいんです」

こうした3年間の研究の他、月1回程度、大学の先生などを招いて講演会も行つ。生徒には「講演会記録カード」を渡し、講演会の要旨や感想を書かせ、そのカードをファイルに綴じさせていく。他に「面談シート」、「総合的な学習の時間」の研究内容も一緒に綴じさせる。やがてそれは「自分史ファイル」になり、自分を振り返ったり、3年次の自分史作りに生かすことができる。

「この時間の実践が、生徒の生きる力の育みにつながっているという手応えを、私をはじめ担当教師は感じています」

実践例 兵庫県立御影高校

昭和16年設立。'99年3月卒業生総数2778名
'99年度入試の国公立大合格者数108名
関関同立甲の合格者数は延べ305名

身近な物を題材に、授業内容を工夫しながら科学的見方を教える

理科嫌いの生徒にも卒業後、役立つ授業を

御影高校では、'98年度から3年次文コース（私立大文系受験型）の選択科目として「環境科学」を開講している。身近な物を題材に、社会的な問題や、地歴、家庭科など多角的な視野の導入、講義だけに終わらせない授業形態など、「総合的な学習の時間」の取り組みに向けて、様々な示唆を与える授業内容になっている。

担当する安岡久志先生は開講の経緯をこう語る。

「'97年度に本校に赴任し、選択科目を担当する機会が与えられました。科学を体系的に教えることはもちろん大事ですが、講義対象である文系生徒、

しかもどちらかと言うと理科嫌いの生徒が社会人になったとき、果たして従来型の講義が役に立つのか疑問でした。身近な物を題材にして、科学的な物の見方や考え方、科学的素養を身に付けさせることも必要なのではと考え、環境をテーマに講義を始めたのです。それが翌'98年度から『環境科学』という名称になりました」

安岡先生は前任校で環境問題の授業を行っており、その経験と知識を活用できる利点もあった。講義は前期と後期でテーマを変え、今年度の前期は前年度に引き続いて「エネルギーと環境」を選んだ。

「エネルギーをテーマにすると、どうしても原子力の問題にぶつかります。原子力と言うと、怖い、危ないというイメージしか生徒は持っていない。そ

しかし、イメージだけで単純に物事を判断するというのは、高校生としては物足りません。エネルギーの安定供給、環境保全、経済成長という三つの立場から正しく理解するために、多角的視野を持たせるといふ観点で授業を進めました」

環境家計簿（家庭から出る二酸化炭素量を光熱等使用量などからチェックする）などを生徒に付けさせながら、科学的視点だけでなく社会的問題、家庭科などの教科の要素も織り込んだ。新しいタイプの授業に取り組む場合、教材作りなどで資料が必ず必要になる。安岡先生は、資料が手に入りやすいテーマを選ぶことも授業の準備作業を上手に進める上で大切だと言った。

「原子力発電の資料はいろいろな所からたくさん出ている他、インターネ

生徒が自分で考える仕掛けを織り込む

授業形式にも工夫が施されている。授業の中で教師による講義は多くても3割程度にし、実験やビデオ鑑賞、関西電力への見学などを盛り込んだ。体験を取り入れることで生徒の興味・関心を引き出す、生徒主体の授業にする、多角的な視野から取り組ませる、という三つのねらいがある。

ビデオ鑑賞に当たっては、キーワードを書き込ませる穴埋め式プリントを配り、ビデオを見ながらプリントを埋めさせて、漫然とビデオを見ることがないような工夫もしている。

考える力を付けさせるために、授業で分かったことなどについて適宜レポートを書かせたり、情報収集能力を養うために新聞記事などのスクラッププ

99年度「環境科学」授業内容(前期)	
4月～9月 エネルギーと環境	
1. オリエンテーション	1時間
2. エネルギーの需給の傾向と、そのバランス	3時間
・(ビデオ鑑賞) ・電力の供給源、発電の仕組み ・(ビデオ鑑賞) ・エネルギーに関する自然科学的基礎知識	
3. 地球の温暖化と、気候変動枠組み条約	2時間
・地球の温暖化とは？ ・省エネルギーの促進 ・環境家計簿で二酸化炭素排出量を調べよう(作業) ・コンセプトマップの作成(作業)	
4. 新エネルギー	3時間
・コンセプトマップの作成(作業) ・新エネルギーとは？ ・燃料電池、太陽光発電など(演示) ・「水の電気分解」「燃料電池」(実験) ・新エネルギーの今後の見通し	
5. 放射線と原子力発電	5時間
・コンセプトマップの作成(作業) ・原子力の構造 ・水力・火力発電とその原理 ・原子力発電とは？(ビデオ鑑賞・講義) 以上で2時間 ・放射線と放射能とは？(ビデオ鑑賞・講義) ・暮らしの中の放射線(講義・演示) 以上で2時間 ・放射線についての実験 ・放射線の人体影響について(ビデオ鑑賞・講義・作業) ・原子燃料サイクルと放射性廃棄物(ビデオ鑑賞・講義) ・プルトニウムと高速増殖炉(講義・ビデオ鑑賞・演示) ・プルスールとMOX燃料 ・さあ、もう一度原子力について考えよう(ビデオ鑑賞・作業) ・コンセプトマップの作成(作業)	
6. パネル・ディベート	3時間
・原子炉解体は必要か(発表)	
6月には関西電力の見学も実施。	

域住民など五つの立場を設定して生徒を振り分け、それぞれの立場から議論を展開させた。

以上のような試みは、教師からの一方通行に終わらせず、生徒からのフィードバックを重視している点で共通している。生徒の主体性、考える力を養うと共に、教師も生徒の状況を把握して、適切な指導ができるのだ。

「環境科学」の評価はテストの結果だけでなく、生徒の取り組みの姿勢をレポートなどの提出物、スクラップブックの出来などを総合して行っている。「テストも通常の教科とは違って、自分の頭で考えているかを試すためにある主張を読んでそれに対して反対の立場で意見を書かせる、などの設問を置いています。知識量を求めるものではないので、試験の際は授業のプリントなど資料の持ち込みも可です」

授業に対する生徒の反応はどうか。「受験と関係ない科目、まして理科嫌いの生徒たちですから、最初は真剣に取り組むか不安でした。しかし、今の生徒は何か作業をさせると、一生懸命やるんです。生徒にとっても一斉授業と違って、新鮮、意外という面があったんでしょう。ディベートもあまり発言しないのでは、と心配していましたが、よく考え、よく意見を出してく

れます。理科が苦手な手のかかる生徒の方が、作業やディベートをさせると他の生徒よりも立派にやっている、とさえ思いました。実際にディベートをしてみて、当初の心配は杞憂でしたね」

安岡先生の試みをバックアップしてきた、進路指導部長の梅田省一先生は「環境科学」の授業をこう評価する。

『「総合的な学習の時間」では、生徒が受け身ではなく、自ら問題を発見して解決法を考えたり、自分で調べてまとめたり、発表することが重要です。ですから、生徒に自発的な意思表出をさせる工夫が必要です。また、『総合的な学習の時間』は教科書にない、新しいことを教えさえすればよいという授業ではありません。安岡先生の授業はその二つの意味からも評価できます」

梅田先生は、「総合的な学習の時間」について「見識を広める、生き方指導的な場にしたい」と言った。そこで'03年



御影高校教務部長
安岡久志



御影高校進路指導部長
梅田省一

化学担当、同校校柱6年目
「入試に直結する科目だけを重視するようではいけない。人間性を養うためのバランス感覚が大切だ」

度からは、「環境科学」の他に進路学習や地域の産業・歴史、社会福祉に関する学習などの追加も考えられると語る。「今の生徒は、大学や職業など進路に関することをよく知りません。高校卒業後、自分がどうなりたいかもあまり考えていない。入試制度を教えることを含めて、進路学習が本校の『総合的な学習の時間』に加わってくる可能性は高いでしょう」(梅田先生)

地域の産業・歴史については、酒造りの伝統を受け継ぐ灘五郷にあることを意識し、その歴史や化学的切り口からの酒造り、さらに江戸や明治にかけての酒と経済、海運と商業の発展についての学習が考えられると言った。

「新課程で授業時間数が減る中、カリキュラム全体に負担をかけず、『総合的な学習の時間』を多くの教師が最も恐れている、ママコト遊びに終わらせないようになっています」(梅田先生)

実践例 宮城県宮城野高校

平成7年創立。普通科481名、総合学科248名、美術科122名。99年度の卒業生は、79名が国公立大へ、184名が四年制私立大へ進学。

生徒が自ら考え、調べる研究の場を入口と出口で展開する

「産業社会と人間」を普通科を対象に実施

創立5年目の宮城野高校は、選択制の拡大や履修方法の弾力化などを特色とし、宮城県の高校教育改革のパイロット・スクールとして期待されている単位制高校だ。同校では、総合学科の生徒に対しては必修の「産業社会と人間」を通して生徒の進路観の醸成を図っていたが、98年度からは普通科においても自己理解と進路選択の意識付けを目的とした「進路設計」を1年次に実施することになった。

「授業は前期集中で週2時間の1単位。2時間連続の授業なので、生徒が考える時間も十分に取ることができま

分なので、その分取り組みはコンパクトな内容になりますが、基本的には総合学科で行ってきたものと同じです」「進路設計」主任・稲継昌毅先生

「進路設計」の授業内容は「自分を

知る」「将来を考える（職業を知る）」「学問を知る」「上級学校を知る」「私のライフプラン」という五つのステップに大別される。つまり、生徒が自己の在り方、生き方、進路について考察する

という、新課程での「総合的な学習の時間」の一つの取り組みとして見ることができ

るやりがいや苦労などにも目を向けさせます。そして、書籍やインターネット、聞き取り調査などを交えながら、自分が興味のある職業の内容や、その職業に向けてどんな努力をすればよいかなどを生徒自身に調べさせます。本校では、アナウンサーや通訳、エンジニアなど様々な職業人を招いた進路講演会を同時期の5月に行っており、社会の第一線で活躍する方々と触れ合う機会を設けて、生徒の調査、研究をサポートしています」（稲継先生）

授業内容が学問研究へと移行すると生徒の課題は「自分が興味を持った職業に就くには、大学で何を学べばよい

年間継続させる可能性もあります。そうすれば職場訪問や大学訪問などの校外活動を盛り込んだり、ディベートなどの表現力育成の取り組みに、総合学科の『産業社会と人間』と同じくらい時間をかけられるでしょうね」（稲継先生）

3年次の自由研究で進路意欲を強固に

「総合的な学習の時間」につながる取り組みとしては、「進路設計」の他に「課題研究」も挙げられる。総合学科の3年次に通年で週2時間実施される授業で、生徒が興味を持ったテーマについて調査、実験、研究し、10月までに論文などにまとめるというものだ。



宮城野高校校長 稲継昌毅
「課題研究」主任、理科担当、「実社会の課題に立ち向かっていく力を総合的な学習の時間」で生徒に身に付けさせたい



宮城野高校総合学科主任 若山英夫
「課題研究」主任、英語担当、「総合的な学習の時間」を生徒が自分の好きなことを見つけ、熱中できる場としたい

「2年次の1月にガイダンスを実施し、研究テーマ例を提示後、生徒に大まかな研究テーマを提出させます。そのテーマを見ながら各教科から担当教師を選出、今年

生徒の研究テーマはまさに多種多様な「多面体の体積を測る」「宮城県の文化財調査」など比較的教科の枠に収まるものもあれば、「パウハウス」「幼児教

「そして、今年度は法学や心理学、工学など、20の学問分野について、大学教授や本校の教師が講師となって講演会を実施。研究の面白さなどを生徒に話しました。職業研究と同様に、生徒は自分の力でそれぞれの学問について調べていますので、この講演会は生徒にとって一つの資料にすぎません。生徒はこの他いろいろな情報を独自に収集し、6月にはその成果を各クラスで発表することになります」（稲継先生）

低学年次の早期に進路を考える土壌を

この後、2、3年次での科目選択を視野に入れた入試研究も含めて大学研究を行い、さらに環境問題や高齢化社会など様々な社会問題と自己とのかわりを論じるレポート「私のライフプラン」の作成をして、「進路設計」は1年次の前期で終了する。自己理解から大学研究までを入学後約半年で終えてしまつのだ。

「取り組みとしては確かに早いと思います。しかし、生徒にはこれで進路を完全に決めてしまつことは求めていません。1年生のうちから進路につ

「進路設計」「課題研究」の評価方法（一部抜粋）		
「進路設計」	作文、レポート、発表への取り組みなどをそれぞれ観点別（下記参照）に点数で評価し、平均が70点になるように配慮。	
	項目例	評価の観点例
	「学問を知る」資料作成及び発表（班別作業）	・発表は内容を自分でよく把握し、分かりやすく伝えていたか
	「学問を知る」まとめのレポート	・発表の問題点とその解決策について深く掘り下げているか
「課題研究」	「私のライフプラン」作文	・自分に対する認識や社会に対する認識が十分か
	課題研究ノートと中間発表を意欲、関心、態度などの観点から評価（50点満点）。これに毎学期提出される課題研究報告書と小論文、作品などを構想力、理解力、表現力などの観点から評価（50点満点）した点数を加え、評価点とする。各分野の平均点が70点になるように配慮。	

取り組みを続けることで、大学入試などに影響はないのだろうか？

「志望学部の研究内容に合わせたテーマを選ん

1年次の「産業社会と人間」「進路設計」を進路指導の導入と位置付けるなら、3年次の「課題研究」は各自のテーマに自由に取り組む中で自己実現の喜びを実際に味わい、高校以降の目標への意欲をさらに強固にする進路指導の集大成の場として、機能していると言えるのだらう。